パレスチナ赤新月社 医療支援事業派遣報告書

大阪赤十字病院　光森 健二

派遣先：レバノン

派遣期間：2025 年 7 月 21 日～2025 年 8 月 14 日

派遣事業名：パレスチナ赤新月社医療支援事業

Ⅰ．事業概要

日本赤十字社（日赤）は 2015 年より中東支援 3 カ年計画を策定し、中東地域への重点的な支援を継続してきました。医療支援事業においては、パレスチナ赤新月社（PRCS）が運営する病院の救急部門にニーズがあることが明らかとなり、2018 年からはレバノン国内 5 か所、ガザ 2 か所の病院への支援を開始しました。

2020 年 3 月、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行により、日赤からの要員派遣は一時中断され、リモートによるモニタリングが継続されました。2022 年には第 2 期事業の継続として派遣が再開され、第 1 期で介入できなかったサファッド病院・ナスラ病院や、途中で中断となったバルサム病院で活動を実施しました。事業の目的の一つには ER での外傷診療能力向上があり、その一環として小型超音波診断装置の供与と、講義・実技による使用指導も行われました。

しかし、2023 年 10 月に中東での軍事衝突により再び事業は中断。レバノン国内でも外傷患者が増加したことを受け、PRCS レバノン支部からは外傷対応能力のトレーニング継続への強い要望が寄せられました。そのため、2024 年からは日本赤十字社現地代表部がパレスチナ人医師をレバノン国内の大学病院に研修参加させる形で教育を継続してきました。

研修参加者からは知識のアップデートができたと評価される一方、より実践的なトレーニングを求める声もありました。今回、レバノン国内の治安改善を受けて、大学病院での研修効果の確認や各病院でのエコートレーニング実施、今後の研修方針の検討を目的に医師派遣が実現しました。

Ⅱ．現地活動

今回、レバノン国内のPRCS病院5か所のうち、安全上の理由で南部のバルサム病院を除き、4病院を各3日間ずつ訪問しました。大学病院での研修を受けた医師やその他の医師に対し、救急外来に来院した患者へ超音波検査を実施しました。適切な症例がない場合には、正常ボランティア（派遣者本人、通訳、病院スタッフ）を対象に臓器描出と正常構造の確認を徹底して行いました。

今回のトレーニングには合計17名の医師が参加しました。残念ながら多様な疾患症例のエコーは限られましたが、全員が腎臓や胆嚢の描出を習得できました。一方で、救急外来に超音波機器を常設している病院は2か所にとどまっており、使用が進まない一因となっていました。各病院の院長には救急外来への常時設置を強く要望しました。

また、2022年の日赤事業で導入された「WHO手術安全チェックリスト」「クリニカルパス」「救急外来でのトリアージと記録」が現地に定着していることも確認できました。

エコートレーニングに関しては「まだ臨床で使う自信がない」という声も多く、今後も継続的かつ実践的な研修が必要と感じました。日赤要員による派遣継続に加え、現地で技術を習得した医師が自らの病院で後進を育成する仕組みが不可欠です。そのため、今後は技術指導と並行して各病院に育成体制の構築を働きかけていくことを、日本赤十字社現地代表部およびPRCSレバノン支部に提言しました。

Ⅲ．現地滞在中の生活について

前回派遣時に比べ安全上の制約はわずかに増していましたが、危険な事案は発生せず、任務を無事に終えることができました。健康上の問題も特にありませんでした。

Ⅳ．謝辞

今回の派遣にあたり、多忙な中で長期の代診にご協力いただいた泌尿器科スタッフの皆さま、また担当医不在の間にご不便やご心配をおかけしたにもかかわらず、ご理解くださった患者の皆さまに、心より感謝申し上げます。